

地域再生の一翼を担う厚木市飯山クラインガルテン



地域住民による「農」の支援活動とネットワーク

(株)まちづくり工房 代表
滞在型体験農園 飯山農楽校 顧問

大橋 南海子
渡辺 貞雄

1. 地域再生の核となる滞在型体験農園

都市が縮退していくなかで、都市農地・都市農業を保全・維持・活用する手段としての「農園」の可能性を探る今回のテーマに対し、地域再生の先導的プロジェクトとして位置づけられた神奈川県厚木市飯山地区の滞在型体験農園「クラインガルテン飯山農楽校(のらっこ)」についてオープン後2年目の初動期の活動状況を以下に報告する。

都市近郊の未活用農地を滞在型の体験農園として整備し、農園が有する交流・体験・教育・学習・レクリエーション等機能を活用して、地域住民と都市住民の交流の輪を広げ、飯山地域の再生・活性化に繋げることを目的とした地域住民主導型のプロジェクトである。

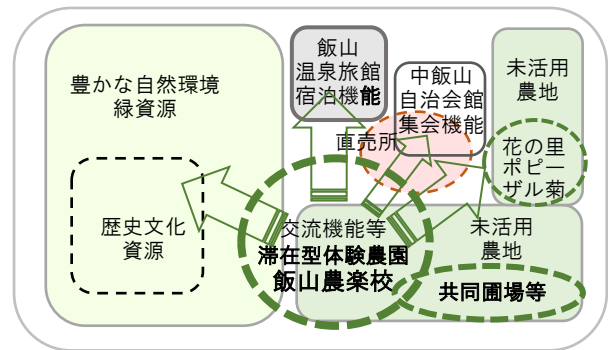
同時に豊かな地域資源—白山山頂から小鮎川沿いに広がる豊かな緑資源、国指定の重要文化財の金剛寺「阿弥陀如来坐像」や飯山観音長谷寺、白龍伝説や飯山七不思議などの歴史文化遺産、かつて首都圏の奥座敷と言われた飯山温泉、地域住民が育てる花の里などを横断的に活かし、市内外の都市住民に豊かな農園ライフを提供し、都会にはない「農の魅力」を伝えるものである。

また、地域住民においては、農園を開設し運営するのみならず、周辺の未活用農地を借り受け、都市農業を安定的に継承し、直売所を開設して地産地消の推進や農の6次化を育む農業振興や地域の雇用促進に繋がる地域貢献としての農商工連携の取り組みでもある。

地域住民自らが地域の構想・計画・実行プログラムづくりを行い、市長へ提案し、地域住民主導の短

期・最優先プロジェクトとして、地域住民自ら地域再生の担い手として農地や農園の整備・運営・維持管理を手作りで行うもので、地域住民主導・参画型まちづくりである。

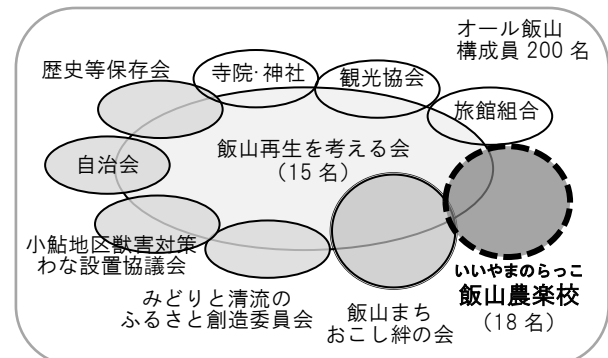
地域の機能構成図



2. 地域再生の経過と地元活動組織の形成

豊かな自然や温泉があり、かつて東京の奥座敷として厚木市を代表する観光名所だった飯山地区は、バブル崩壊後温泉旅館が半減するなど低迷が続いていた。地区活性化に向けて単独の団体による取り組みでは奏功せず、「オール飯山」活動の必要性が高まっていた中、自治会、寺社関係者、観光協会、旅館業組合と住民活動団体の代表 15 人が集まり、平成 26 年 1 月に「飯山再生を考える会」を発足し、

地元組織「オール飯山」概念図



住民主体・主導の地域再生に立ち上がった。「飯山再生プロジェクト計画」を作成して市長に提案し、その中の住民が主体となって直ちに実施する短期計画の最優先プロジェクトである「飯山クラインガルテン事業」実現に向け、平成 28 年 3 月に「オール飯山」の各団体から有志を選出し、地域住民連携活動組織「飯山農楽校」を立ち上げた。

3. 滞在型体験農園飯山農楽校の概要と特性

開設にあたっての目標は、飯山農楽校での体験を通じて農と食の大切さや命と健康の尊さを学んでもらい、地域との交流の輪を広げることにある。

平成 28 年 3 月に圃場の一部を整備してプレオープンし、翌年の平成 29 年 3 月に概ねの圃場整備を終えグランドオープンした。

地主農家を含む地域住民組織の「飯山農楽校」が、農園開設事業主体及び運営主体となって、未活用農地 9 か所約 6,400 ㎡を地主から借り受け、農園開設に伴う事業資金を一部負担し、手作りで圃場及び農園内諸施設の整備を実施した。

オープン後 2 年目となる現在、第 1 圃場の滞在型体験農園は、1 区画 30 ㎡、40 区画を年間利用料 37,000 円（種苗・肥料・農機具代、農作業指導、温泉 1 泊宿泊朝食付き）、指導及び講習会は原則月 1 回第 2 土曜日とし、夏場の 3 ヶ月は更に 1 回追加して夏野菜特別指導を実施するなど校長以下スタッフ十数名による丁寧な農園運営を行っている。

農園利用者は、当初の近隣住宅地等の居住者から徐々に市域に拡大し、横浜市や都内から通う利用者もあり、ファミリー層以外のグループ利用者や外国人及び企業利用など多様化してきている。昨年から継続利用者も多く、利用者の定着化傾向がみられ、今後、利用者数の増大が期待できる状況にある。

当農園の特性は、次ページの表にまとめられるが、

農楽校の圃場と栽培講習の様子



滞在型体験農園飯山農楽校の概要

所在地	厚木市飯山 4094、4117 他 7 か所
敷地面積	第 1 圃場 1,074 ㎡、第 2 圃場 1,242 ㎡。 その他共有圃場・駐車場を含み全体で約 6,400 ㎡。
農園區画	滞在型体験農園 1 区画 30 ㎡ 40 区画 企業体験農園 1 区画
利用料金	滞在型体験農園、年間 37,000 円（種苗・肥料・農機具代、農作業指導、飯山温泉宿泊特典として一泊朝食付き費用含む）
作付け	ジャガイモ・キャベツなど 20 品目
利用期間	3 月から翌年 1 月までの 11 か月
作業指導等	作付け、栽培指導など指導・講習会は原則月 1 回、第 2 土曜日。 6、7、8 月は夏野菜栽培特別指導を追加。
農園内施設整備状況	手作り休息スペース、ビニールハウス、農機具等置き場、トイレ、駐車場等
農園開設事業費	圃場整備・農機具購入費計 3,800,000 円 （自己資金 1/2、厚木市農業体験農園開設事業費補助金 1/2）
周辺連携施設	中飯山自治会館（平成 29 年 12 月竣工、集会場・直売所（土・日、10 時～13 時）） 花の里（5 月ポピー祭り、11 月ざる菊祭り開催）、アヤメの里 飯山温泉旅館等 4 軒

この内、「サポート付き、手ぶらで OK、種苗・肥料込み、採れたての旬の野菜を収穫し健康な「食」を享受できるなどの特性及び水場・トイレ・休息スペース・駐車場等施設が確保されている、共同利用が可能」の項目は、近年、他の民間等の貸し農園でも広く実施されてきており一般化傾向にある。

<滞在型農園の試みとニーズ多様化への対応>

農楽校の特性は、初年度から利用料金の中に一泊朝食付きの温泉旅館宿泊費約 5～6 千円を組み入れ、温泉で体を労い、農地、清流、自然、歴史・文化資源などに触れながらゆったりと農園ライフを楽しむ滞在型農園を目指していることである。

日帰り型市民農園機能（近隣の都市住民が余暇活動として自家用野菜等を栽培し、高齢者の生きがいづくりや児童の体験学習などに利用）や観光農園機能（果物や野菜の収穫体験やポピー等花の摘み取り体験）に、更に宿泊機能を加え、より長時間の濃密

な滞在型農園ライフを提供する試みである。

また、同時に区画割に加え、企業利用やハーブなどの共同利用型、予備的圃場も確保し、多様化する農園ニーズに対応できる仕組みも有している。

なお、首都圏立地の滞在型農園は4件程と少なく、都心から80～100km圏に位置し、30～40㎡のラウベを持ち、区画は100㎡を超え、年間利用料40万円前後が多い。一方、飯山は都心から52km、車で渋谷から246号線を経て1時間20分、新宿から小田急線とバスで1時間40分と日帰りも可能な距離にありながら、自然や温泉を充分満喫し、既存旅館への宿泊も可能という、恵まれた条件下にある。

利便性やコストパフォーマンスの面からも需要が期待できるし、停滞する地元温泉旅館の宿泊増に繋がる。今後、利用者の週末滞在・休暇ニーズに合わせて、順次宿泊日数の拡大や短期間民泊などプログラムの多様化を進める予定である。

クラインガルテン飯山農楽校（のらっこ）の特性

①	豊富なサポート人（地主農家や校長以下スタッフ十数名による作業指導とJA厚木営農指導員による栽培資料説明）
②	心温まる準備態勢で・・・手ぶらで通えます。（種・苗、肥料、農機具、支柱・ネット・マルチ等準備）
③	採れたて旬の野菜を収穫して健康な「食」を楽しめます。（20種類の作付け）
④	飯山は自然豊かな地域資源に恵まれています。（小鮎川の清流、農地、自然や歴史・文化資源が豊富。飯山温泉旅館に滞在し、温泉で体を労りながら農園ライフを楽しめる。）
⑤	新しい「農」のコミュニティづくりです。（農を通じた相互交流により地域の絆を深める。）
⑥	農園ライフ・農園活動プログラムの充実を目指します。（利用者とのワークショップを通じて、より豊かな農園ライフをめざす。）
⑦	地域貢献・地域活性化の理念を持っています。（未活用農地の活用、直売所と連携した地産地消による持続的農業振興、次世代を担う子供達の自然体験教育の推進、新たな生きがいや雇用の創出など）
⑧	農園に必要な設備は万全ではありません。発展途上です。

*クラインガルテン「飯山農楽校」事業計画書（H29.4）より抜粋

＜豊かな農園ライフの提供＞

農園利用者は、月1回の定例栽培指導、夏場3回の特別指導、週末の個別指導など年間を通して技術

ポピー祭り



温泉宿泊



バーベキューとワークショップ



タケノコ堀り



藤籠づくり体験



支援を受けながら野菜作りを行う他、年十数回開催される四季の花祭りイベント、バーベキュー交流会・ワークショップ・温泉宿泊、サツマイモ堀りやシタケ栽培体験、藤籠づくりなど農園ライフ講座、歴史巡りツアー、先進事例視察研修などへ参加し、農園利用者間はもとより、地元農家・農園スタッフ・地域活動グループ・地元住民、域外からの来訪者など多様な人との交流・連携を深めている。

これらプログラムは、地元発意によるものが多いが、交流会のワークショップ「皆で楽しむ農園ライフ」では利用者から数多くの提案もなされている。

今後は、季節と旬を感じるイベントの他、利用者自身が望む新たな農園ライフプログラムについても検討を行い、豊かな農園ライフの運営に利用者スタッフとスタッフが協力して取り組む予定である。

年間を通した農園ライフプログラム（H28～30）

1月	飯山歴史・地誌巡りツアー（農園ライフ講座）
2月	藤籠づくり体験（農園ライフ講座）
3月	農楽校開校式（農楽校） 原木シタケ栽培体験（農園ライフ講座）
4月	あつぎ飯山桜まつり（オール飯山） たけのこ堀り体験（農園ライフ講座）
5月	あつぎ飯山花の里ポピー祭り（オール飯山）
6月	あつぎ飯山アヤマ祭り（オール飯山） ジャガイモ堀り体験（農園ライフ講座）
7月	交流バーベキュー大会（農楽校）
8月	飯山産すいか食べ放題（農楽校）
9月	ひょうたんランプづくり（農園ライフ講座）
10月	サツマイモ収穫体験（農園ライフ講座）
11月	あつぎ飯山花の里ザル菊祭り（オール飯山） 先進事例視察研修（農楽校） 交流BBQ・ワークショップ・温泉宿泊（農楽校）

＜地域住民による農園サポートと絆・人材ネットワーク＞

農園運営については、栽培経験豊富な地元スタッフによる指導やその準備はもとより、他の圃場の整備・運営を含め、丁寧できめ細かい農園利用者への支援を指針としている。作付け時にはJA厚木営農指導員の協力も得て万全な体制で臨んでいる。

スタッフの中には、自治会館で週末開催する直売所を運営し、あつぎ子ども食堂に食材を提供するなど地産地消を推進する「飯山まちおこし絆の会」、未

活用農地を花の里に再生した「みどりと清流のふろさと創造委員会」、里山管理や間伐材の伐採・活用を手掛ける「与作の会」、鳥獣被害から農作物を守る「わな設置協議会」など農に関わる他の活動団体に長年所属し活動している人、農ライフ講座で講師を務めるなどマイスター的人材にも恵まれている。

こうした地域の活動団体と密接に連携した農ライフ全体の支援ができる体制・ネットワークが既に構築されていることが地域の強みとなっている。

地域を多方面から支える地域住民間の絆・人材ネットワークの豊富さが、飯山の魅力となっている。

＜農を媒体としたコミュニティ再生への挑戦＞

農楽校が目指す地域像は、地域活動団体による包括的な農ライフ支援ネットワークを築き、農園利用者を始め、農のイベントや研修・体験を通じて、近隣住民はもとより、厚木市民、域外の都市住民など多くの人々との交流の輪・コミュニケーションネットワークを拡大することであり、最終的には、「農」を媒体とした都市住民と地域住民による新しい「農」コミュニティ形成への挑戦である。

今まで培ってきた飯山の既存コミュニティを継承しながら、新たな「農」コミュニティを加え、重層的で持続可能な地域コミュニティの再生を目指すもので、その第一歩となる地域活動である。しかも、滞在型を志向することで、一過性ではない持続性のある確固とした地域社会を創り出すものでもある。

4. 今後の展望と課題

グランドオープン後2年目を迎え、概ねの農園整備や機材の準備は整ってきたが、初動期であり、種々の挑戦を始めた段階であり課題は多い。

今後、持続的に農園運営をしていくためには、特に、農園利用者の拡大、サポート人材の育成、収益事業の取り組みの3点が重要である。

① 滞在型農園利用者の拡大、交流人口の拡大

継続利用者、厚木市外（横浜市や都内など）からの利用者、外国人や企業による利用は前年より増加したが、今後とも、公式サイトからのアクセスを含め、幅広い媒体によるPRに努め、利用者の拡大に

向け引き続き努力していく必要がある。

他に例を見ない飯山温泉旅館一泊朝食付きの特典は好評であるので、今後は、滞在型利用者のニーズに合わせ、農作業後の温泉利用プログラム、年間を通じて複数回宿泊できる仕組み、農家の空き室利用の検討なども必要となる。

同時に、四季に合わせたイベント、各種農園ライフ講座、歴史巡りや花の里ツアーのPRや拡充により交流人口の拡大を図ることも重要となる。

② 農園や圃場サポート人材の育成

農園スタッフはリタイア年齢層が多く高齢化してきており、中長期的には農園や圃場のサポートスタッフの確保が課題となる。

スタッフにとっては「現在の農園利用者に飯山への愛着を持ってもらい、いずれは、農楽校を運営する仲間として一緒に活動出来たら夢」がある。少しずつではあるがそうした仲間が増えてきているが、地域貢献、非営利活動の面もあり、その数は限定的である。今後、複数年に渡って、継続して農園を利用する方々の中から農園の準備作業等を担う仲間が生まれることを期待するものである。

③ 持続的な運営のための収益事業への取り組み

初動期でありインフラ・設備投資の地元持ち出し分が回収されず、十分なスタッフ人件費も確保できない状況にある。もともと、地域の信頼や協力関係に基づく地域再生のための地域住民活動であり、再生に伴う利益誘導の意図はないので、ボランティアの色彩が強い。

しかしながら、持続的に農楽校を運営していくためには、収益性が必ずしも高いとは言えない体験農園事業だけでは不十分であり、地域全体として、農の2次化により付加価値の高い加工品の開発・販売や3次化としての直売事業の拡大、農家レストラン事業の展開など収益性のより高い事業についても、今後、検討していく必要がある。

